

## 「上田貞治郎写真コレクション」の伝来経緯と都市記述の方法論

大阪市立大学大学院文学研究科 アジア都市文化学専攻 研究生

小川直人

戦前期日本を代表する大阪の写真材料商、上田写真機店の創業者上田貞治郎（1860～1944）が蒐集した「風景古写真」1000枚余を収めた上田貞治郎アルバム10冊が、2005年に大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センターによってデジタル・アーカイブス化された。もっとも、デジタル・アーカイブスの構成古写真は、アルバムに貼付されていた貞治郎自筆のキャプションによって「映像内容」の概要情報が認識されたに留まり、各古写真群の仕分け、各古写真群の伝来過程、アルバムの発生、史料整理／管理の史的過程など、古文書学／記録史料学的方法による多様な潜在的史料情報の検証ははまだ手つかずの状態である。

本格的な分析は別稿を準備中であるが、以下では上田家に遺された「上田貞治郎関係文書」を利用し、史料伝存の史的過程に照準する古文書学／記録史料学的な「伝来論」の視点から、「上田貞治郎写真コレクション」が一定の纏まりをもつ複数の「古写真群」として現在に伝存していることを簡潔に紹介したい。

「上田貞治郎写真コレクション」を構成する主要な古写真は、貞治郎のコレクションにおさめられた伝来経緯に注目すると、以下の3種類の「群」に分類できる。

### ■1. 譲渡された古写真群 ―写真販売店主・和田猶松の撮影原板―

「上田貞治郎写真コレクション」の白眉は、明治期の全国名所旧蹟古写真群である。質量において同古写真群の基底部をなしているのは、大阪新町橋東詰で写場／写真販売店を営業していた和田猶松が、明治3年9月以前から日清戦争終結期の明治28年頃にかけて、主に土産用販売写真として撮影した湿版写真を原板とする古写真群である。

和田原板古写真群は、貞治郎が古写真コレクションの形成に本腰を入れ始めた昭和2年10月頃までには、上田写真機店の近所に写場を構えていた猶松の嗣子和田奈良松から譲渡されたと思量される。UCRC デジタル・アーカイブス「上田貞治郎写真コレクション」において、和田原板古写真群のみを集成したアルバムは「旧大阪および紀州より関西諸所 五集」、「関東名所 近江美の尾張駿河東京横浜京都」の両アルバムである。

北門の小樽から西国は生野銀山近郊まで、重量の組立暗箱を携えて全国を行脚した和田猶松は、全国「各地の名所旧蹟を撮影して写真を作り大いに発売せられ、画はがきあらざる時代とて盛んに歓迎された」のであった。両アルバムに残る和田猶松撮影古写真を瞥見すると、土産用写真販売店主としての和田猶松の品揃形成の商業戦略が

透けてみえてくる。猶松は、第一回内国勸業博覧会、工科大学、東京曙新聞社など文明開化の新風物だけではなく、上野彰義隊墓苑や戊辰戦争の傷痕が生々しい会津鶴ヶ城、あるいは浅野内匠頭や楠正成の旧蹟など、佐幕派的心情や近世以来の庶民的憧憬を汲取り得る被写体を遺漏なく選びとっている。遺された和田原板古写真群からは、近世近代移行期の錯綜した精神史的状況に鑑み、多様な顧客の消費心理に適う多様なジャンルの商品を抜け目なく品揃えしようと企てる、和田猶松の市場を見据える商人としての写眼が垣間見られるのである。

上記の和田原板両アルバムの古写真は、コレクションの各アルバム「大阪北東方面第一集」、「No.2 大坂西南部 道頓堀 四ツ橋」、「No.4 西北部 築港大水害」、「No.3 東南部 ナンバ 天下茶屋 住吉」に、多数が複製されて貼付されている。また、それらのアルバムに和田原板両アルバムを加えれば、「上田貞治郎写真コレクション」の過半は、和田原板古写真群に起源をもつアルバムで構成されていることになる。従って、和田原板古写真群が、「上田貞治郎写真コレクション」の史料秩序総体の基底部をなしているといっても過言ではなからう。その意味で、上田貞治郎写真コレクションの史料学的解明の一つの糸口は、和田原板古写真群の解明にあるといえる。

明治初期大阪の写真師・和田猶松の事績は、従来、桑田商会の創始者桑田正三郎の自伝『桑能若苗』（大正5年）に若干言及される程度で、その作品（商品）群や全国行脚の実態などの詳細は不明であった。また明治初期の重要な輸出品であった横浜写真の研究を除けば、明治初期の販売用土産物写真の系譜は一次史料の制約が大きく、従来の写真史学では本格的な研究対象とはされず、依然として詳らかではない。それゆえ、写真販売業者和田猶松のアルバムの確認は、「上田貞治郎写真コレクション」の副次的ながら重要な成果といえる。

## ■2. 購入した古写真群 ―荒木伊兵衛古書肆―

貞治郎は、大正15年には古写真蒐集を開始しており、コレクション形成のために京阪神の古書肆巡回に熱を入れ、古書即売会にもしばしば出向いて古写真や写真関連書を購入している。特に懇意にした古書肆は、大阪市西区江戸堀の老舗荒木伊兵衛。昭和2年3月28日、貞治郎は荒木から四ツ切古写真20枚を購入し、うち16枚の複製を和田猶松の嗣子奈良松に依頼した。古写真は「明治三十五年頃モノ」であった。

デジタル・アーカイブス「上田貞治郎写真コレクション」のうち、一連のシリーズで構成されている「大阪中之島剣先大阪ホテルの屋上より展望したる大阪市全景 明治三十五年撮影」アルバムや、「No.2 大坂西南部 道頓堀 四ツ橋」アルバム所収の「木津川尻千本松」古写真が、荒木伊兵衛経由の古写真群に比定できるが、後者については一層の検証を要するだろう。その他にも、大正15年10月23日に木綿屋橋詰の書林倶楽部の即売会で古写真を60銭で、昭和3年12月25日に京都四条新町文福堂で「大阪の古写真」を購入したが、それらがどのアルバムに貼付されたのかは現段階で

は判然としない。

### ■3. 上田貞治郎撮影の「現代写真群」と都市記述の方法

精確に言えば、貞治郎撮影の写真は「古写真」というよりも、むしろ貞治郎が生きるいま／この刹那を、特定の動機において切取った「現代風景写真」である意味で、和田原板古写真群などの純然たる「古写真」とは異質な写真群である。貞治郎の撮影写真の年代分布は、明治30年から昭和初年の集中的な撮影行まで20年余の範囲に及んでいる。

「大阪 明治四十一年以前」アルバムに収められた「箕面瀧」の写真には、「明治三十年頃 アドレーキニテ初メテ写ス」とキャプションが添書されている。そのことは、上田写真機店開業（明治34年9月）以前の貞治郎が、いわばアマチュア写真家の一人としてアドレーキ・カメラで撮影した、最初の作品である可能性を示唆する点で重要である。突発的な天災による都市風景の変貌は、貞治郎の写欲を掻き立てたようである。「大阪 明治四十一年以前」アルバム、「No.3 東南部 ナンバ 天下茶屋 住吉」アルバム、「No.4 西北部 築港大水害」アルバムには、明治42年7月の北区大火、明治45年1月の難波大火、昭和9年9月の築港水害について、貞治郎撮影のドキュメンタリー的な記録写真群が、地図を添付するなどの工夫を伴い、災害前後の風景の変貌を視覚的に一覧可能な意匠を凝らして貼付されているのである。

都市風景をめぐる時空間の変貌に対する貞治郎の歴史地理的な感受性は、昭和2年10月18日から昭和3年7月初旬の大阪市内撮影行において最も明瞭に顕現する。天王寺公園、大江神社、心齋橋、戎橋、千日前、坂町、日本橋、浪花橋、難波駅、廣田神社、南北御堂筋、大江橋、中之島、堂島、川口方面など、貞治郎が撮影した都市風景は、予めコレクションにおさめられていた和田原板や別の明治期大阪古写真の映像風景とまさしく同一の風景／場所が事前に選択されていたことに留意したい。

「明治大阪の風景」と「昭和大阪の風景」と――およそ半世紀の時空を隔てたこの定点観測による都市風景の比較対位的な企ては、いわば都市大阪の変貌を「テキスト」として可視化する、貞治郎の歴史意識の方法論的な「実験」であった。たとえば「No.2 大坂西南部 道頓堀 四ツ橋」アルバムには、明治初期と昭和2年の「大江神社」の今昔風景が比較対位的に一望できるデザインのパージがある。同ページに附された貞治郎の感慨が入り雑じったキャプション――「昔を偲ふべし」の一言は、都市大阪の風景を半世紀にわたる今昔の時間的変貌において自覚的に測定しようとする貞治郎の写真撮影の動機、すなわち「大阪都市史」の可視化という歴史学的方法意識の端的な表徴なのである。この企てを通じて、貞治郎は都市風景の変遷を可視化した「今昔比較対位法」のアルバム、「大阪北東方面第一集」、「No.2 大坂西南部 道頓堀 四ツ橋」、「No.4 西北部 築港大水害」、「No.3 東南部 ナンバ 天下茶屋 住吉」を編制している。

とすれば、コレクション形成から撮影行、そしてアルバム作成という蒐集家・上田貞治郎による一連の写真経験のゆくえは、大阪都市史のビジュアルテキストの編纂、あるいは「大阪・都市写真史」の編制という、1920年代における新しい都市記述の方法論の発生へと到達したと解釈できよう。いうまでもなく、歴史的な厚みに裏打ちされた貞治郎の「都市写真〔史〕」の企ては、ほぼ同時代の光画グループによる都市観照の作法／写眼とは明らかに異質で別系譜にある点で、1920、30年代のモダニズムの世相を投影した「都市写真」というジャンルに、新しい解釈を持込むにたる繊細だが強靱な贅力を秘めているだろう。

以上、「上田貞治郎写真コレクション」を構成する主要な古／写真群の伝来経緯について概説してきた。最後に、「上田貞治郎写真コレクション」が孕むある種の「デジャヴュ」について一言しておきたい。1980年代に上田貞治郎旧蔵アルバムの数冊を点検した大阪市史編纂所史料調査会〔当時〕に堀田暁生氏は「大阪関係の二百数十枚にはこれまでよそで見たものもかなり含まれている」と指摘した（読売新聞大阪社会部編『おおさかタイムトンネル浪速写真館』朋興社、1985年、8頁）。堀田氏はその一因を、上田コレクションが方々に貸与されたであろうことを推測していた。事実は堀田氏の慧眼通りで、「上田貞治郎関係文書」を検証すると、昭和3年7月26日以降、和田奈良松が複製した古写真を大阪市史編纂所に提供する契約が取結ばれている。また同年7月14日には大阪朝日新聞社主催の「維新以後大阪市史料展」に、「大阪中之島剣先大阪ホテルの屋上より展望したる大阪市全景 明治三十五年撮影」アルバム、「No.4 西北部 築港大水深」アルバム、「No.3 東南部 ナンバ 天下茶屋 住吉」アルバムが出品されている。

これ以後も、しばしば各種展覧会への上田コレクション利用の申込みが確認でき、これらの諸事情から上田コレクションの古写真が様々な機会を通じて江湖の眼に触れることになったと思量されるのである。現在、大阪市史編纂所が所蔵する大阪市内古写真の一部も、あるいは上田貞治郎所蔵古写真の複製である可能性も考えられる。いずれにせよ、「上田貞治郎写真コレクション」につきまとう「デジャヴュ」は、戦前以来の頻繁な「出品歴」とその二次的な再利用に要因を求めることができるだろう。